

〈研究ノート〉

## 『源氏物語』における嫉妬の諸相

Various phases of jealousy in “The Tale of Genji”

片山 剛<sup>1</sup>

### 要旨

人の心の機微を描いて他の物語の追隨を許さぬ名作『源氏物語』には嫉妬の感情も随所に描かれる。たとえば、女性主人公と言ってもよい紫の上は何ごとにも完璧な人物でありながら、嫉妬深いところが欠点のように描かれる。しかし実はそれこそが彼女の個性であり人間的魅力でもあるともいえる。本稿では、嫉妬せざるを得ない人々の、その嫉妬ゆえにまた悩みを重くする姿が、物語をどのように深みのあるものにしてしているのか、そして嫉妬の描写が人物造型にどのように関わっているかを探ってみたい。

キーワード：嫉妬, 源氏物語, 平安時代

Jealousy, The tale of Genji, Heian-period

### はじめに

筆者は、貴族階級の一夫多妻がもたらした前妻（こなみ）の後妻（うはなり）に対する報復行為である「うはなり打ち」に関心を抱き、その確執の歴史的な変遷についての覚書をこれまでに発表してきた<sup>1)</sup>。それは、実際に起こった「うはなり打ち」の検討にとどまるものではなかった。むしろ中核になったのは、人々はなぜその行為に至ったか、あるいは至らずに済ませられたか、その行為がどれほど人を苦しめるものであったか、逆にその行為に及ばないことがどれほど安寧を導いたか、起こしてしまった行為にどのような反省をしたか等々をテーマとして描かれたフィクションについて考察することであった。また、主として貴族社会の習俗であった「うはなり打ち」が、庶民の生活の向上とともに市民社会にも広がり、いつしか「本妻側によるうっぶん晴らしの儀式」と化するに至った姿も見届けることができた。それはほとんどフィクションとノンフィクションの融合のような営為であった。これらを俯瞰するために資料としたものは、上代から近世までの史書、古記録（貴族の日記）、物語、説話、戯曲（能、浄瑠璃など）さらには風俗に関する随想や研究、絵画などに及んだが、それでもまだまだ触れられなかったものは残されており、今後の課題をせざるを得なかった。

また、『源氏物語』についてもいくらか触れてはおいただが、いくら挑んでもことごとく跳ね返されるような厚みのあるこの作品の内容の豊富さに圧倒されるように、「うはなり打ち」にとどまらぬ、少し広い意味での「嫉妬」という感情については不十分な言及しかできなかったことを物足りなく思っていた。そこで本稿では、せめて一石を投ずるべく、この作品に絞って、嫉妬の感情がどのように描かれているのかを読み解き、人物造型とのかかわりや物語の主題、構成、展開などにもたらす意味について考察を加えようとするものである。

なお、本文の引用は小学館『新編日本古典文学全集』<sup>2)</sup>により、必要に応じて書き込みを加え、その該当ページを記しておいた。

### 1 後宮における嫉妬

制度としては一夫一妻ではあったが、『源氏物語』が書かれた時代の男性貴族は複数の妻を持つことが可能で、貴族の妻たちは多くの場合夫の家で同居するわけではなかった。彼女たちは実家に留まり、夫が通って来るのを待つか、藤原道長とその妻倫子のように妻の家に夫が同居するのが通常の結婚形態であった。よって、妻同士が顔を合わせる機会はほとんどなく、夫の女性関係を妻が知る

1 Takeshi KATAYAMA 千里金蘭大学 教養教育センター

受理日：2019年9月6日

のは、出入りする貴族たちから情報を入れる女房や行動範囲の広い下仕えの者などの噂話に拠るところが多かった。

しかし天皇となれば話は別である。外出は基本的に許されず、外泊などもってのほか、という立場だけに、妻は内裏後宮に召し出される。それだけに、後宮では女御更衣などがお互いの顔を見ることがあり得たのである。たとえば『大鏡』「師輔」に、村上天皇中宮の安子が弘徽殿の上の御局にいたとき、隣の藤壺の上の御局にいた宣耀殿の女御芳子を覗いて、その「うつくしくめでた」いありさまに激しく嫉妬する話があった<sup>3)</sup>。

後宮での嫉妬は『源氏物語』にもしばしば描かれる。何と言ってもその代表的なものは「桐壺」巻の弘徽殿女御による桐壺更衣への嫉妬であろう。弘徽殿女御という人は「かどかどしきところものしたまふ」(桐壺p36)「御心いちはやくて、かたがたに思しつめたることどもの報いせむと思すべかめり」(賢木p101)という気性の激しさがあ、これは「いと急にさがなくおはして」(賢木p98)という父右大臣譲りなのであろう。

弘徽殿女御の嫉妬は、自らが右大臣の娘であり、桐壺更衣が大納言の娘に過ぎない(しかも大納言は亡くなっていて後ろ盾がない)という身分上の優越感を踏みにじられたことが大きい。帝は弘徽殿を差し置いて「さるべき御遊びのをりをり、何ごとにもゆゑあることのふしぶしには、まづ(桐壺更衣を)参上らせたまふ」(桐壺p19)という行動をとるが、それはやはりほかの女性の気持ちを理解できない帝王という最上の位にある人物の弱点でもあろう。

弘徽殿はまた、自分の子がすでに春宮となっているにもかかわらず、桐壺更衣所生の皇子(光源氏)が容貌、学才などであまりにも世評が高いため、「坊にも、ようせずは、この皇子のみたまふべきなめりと、一の皇子の女御(弘徽殿)は思し疑へり」(桐壺p19)という強い猜疑心を持たざるを得なかった。帝はそんな弘徽殿に対して、最初に入内した人でもあるだけに重んじてはいるし、彼女の言うことは、煙たくは思いながらも無視することはできないでいる。この優柔不断はのちに葵の上と六条御息所の車争いの際に見られる光源氏のそれと同じものであろう。

弘徽殿にとって目の上の瘤であった桐壺更衣は、光源氏三歳の時に「人のそねみ深くつもり、やすからぬこと多くなり添ひ」(桐壺p31)「あまたさる

まじき人の恨みを負ひしはてはて」(桐壺p31)にあえなく他界する。その際も弘徽殿は弔意を示すどころか、「なほゆるしなうのたまひける」(桐壺p26)という態度を取り、平然と音楽などを催している。

それでは弘徽殿女御は桐壺更衣逝去後に入内した藤壺女御にはどのように向き合ったのであろうか。

更衣亡きあと悲嘆にくれる帝から入内を求められた時、藤壺の母は「あな恐ろしや。春宮の女御のいとさがなくて、桐壺更衣のあらはにはかなくもてなされにし例もゆゆしう」(桐壺p42)と、強いためらいを抱いた。入内して男子を生めばその子は将来の天皇になりうるという政略的な意思は働くことなく、ひたすら娘の安寧を願う「母なるもの」の冷静かつ客観的な視点が描かれている。ところがこの母はその後まもなく亡くなったため入内は実現することになったのである。

藤壺女御と桐壺更衣の違いは何と言っても家柄である。皇族出身(先帝の皇女)の藤壺と大納言家の桐壺では格段の差があり、大臣家の娘である弘徽殿はちょうどこの二人の間に位置することになる。そこで「これは、人の御際まさりて、思ひなしめでたく、人もえおとしめきこえたまはねば、うけばりてあかぬことなし」(桐壺p43)という具合に、身分の高さゆえにほかの女性たちは、藤壺に対して桐壺更衣に挑み心を持った時のようにはものが言えなかったのである。

それでも弘徽殿が藤壺に対して嫉妬心を持ち続けたことには変わらず、「この宮(藤壺)とも御仲そばそばしき」(桐壺p44)関係であり、のちに男子(冷泉帝)を生んだ藤壺は「弘徽殿などのうけはしげに<sup>4)</sup>のたまふと聞きしを」(紅葉賀p325)と陰湿な呪いの言葉を弘徽殿が吐いたことを聞いている。ただ、この時点で弘徽殿の生んだ春宮(朱雀帝)はすでに成年に達しており、さしあたって新皇子は春宮の身分を揺るがすものではなかった。ところが、藤壺が弘徽殿を超えて中宮になると「弘徽殿、いとど御心動きたまふ」(紅葉賀p347)ことになり、仲睦まじい帝と藤壺の関係を目の当たりにすればするほど「をりふしごとに安からず思せど」(花宴p353)という心境にもなる。譲位後の桐壺院がそれまで以上に藤壺と一緒に暮らすので、「今后<sup>5)</sup>は心やましう思すにや、内裏にのみさぶらひたまへば」(葵p17)と息子の新帝につきっきりになり、桐壺院が病に苦しんだ時も、弘徽殿は見

舞いたいと思うものの「中宮（藤壺）のかく添ひおはするに御心おかれて、思しやすらふ」（賢木p97）ことになる。

ひととおりの嫉妬の対象とはなりつつも、藤壺はそれによって人生を狂わされることはなく、また彼女自身が嫉妬に狂うこともなかった。ただ、容赦ない作者は光源氏との密通と懐妊という余人の味わうべくもない苦しみをこの貴婦人に与えるのではあるけれども。

光源氏に対する弘徽殿の憎しみは執念深いもので、光源氏が朧月夜と密会していることを父右大臣から聞くや、父もあきれほどの激しさで光源氏を攻撃、罵倒し、「このついでにさるべきことども構へ出でむによきたよりなりと思しめぐらすべし」（賢木p149）と光源氏を陥れる計略を考えるに至る。右大臣は、妻の葵の上を亡くした光源氏と朧月夜が結婚することを容認する態度を示していたこともあったが、それに対しても弘徽殿は「いと憎しと思ひきこえたまひて」（葵p75）と猛反対の姿勢を貫いていた。さらに、光源氏が須磨に退去してからも手紙のやり取りを続ける上達部に対して激しく非難するなど、死者に鞭打つかのごとき行為を繰り返す。これは桐壺巻で更衣亡きあとになお彼女を許さない姿勢を崩さなかった「いとおし立ちかどかどしきところ」（桐壺p36）のある弘徽殿の性格のあらわれであろう。

その雲行きが変わるのは、皮肉なことに、藤壺が出家し、光源氏を事実上追放し、わが子は帝位に就き（朱雀帝）、父右大臣は太政大臣に至って我が世の春を謳歌する立場になった後のこと、おごれる者も久しからずある。

亡き桐壺院が須磨の光源氏の夢に、続いて都の朱雀帝の夢にも現れ、院に睨まれた帝は目を病む。まもなく太政大臣がなくなり、弘徽殿も病に陥る。そして朱雀帝は長らく反抗することをしなかった母の諫めを振り切って光源氏の復位を決めてしまうのである。

帰京した光源氏に対して弘徽殿は「御なやみ重くおはしますうちにも、つひにこの人をえ消たずなりなむことと心病み思しけれど」（濡標p279）とほぞを噛んでいるが、光源氏は弘徽殿を恨むことなく親かな態度で接し、後年、光源氏の見舞いを受けた弘徽殿は「（光源氏は）いかに思し出づらむ。世をたもちたまふべき宿世は消たれぬものにこそ、といにしへを悔い思す」（少女p75）と、自分の行為を悔いるばかりになる。

後宮の争いとして次に取り上げたいのは冷泉帝の時代で、権中納言（かつての頭中将）の娘の弘徽殿女御と六条御息所の忘れ形見で光源氏の養女として入内した斎宮女御（後の秋好中宮）の関係である。権中納言は弘徽殿女御を入内させたとき「思ふ心ありて」（総合p374）、すなわち立后させることを考えていた。先の中宮は藤壺で皇族（源氏ともいえる）だっただけに、次は藤原氏から、そしてもちろん自分の家からというのは彼にとっては悲願なのである。実際、源氏から后が続いて出るのは好ましくないという考えがあり<sup>6)</sup>、斎宮女御が立后するときには「源氏のうちしきりにあたまはんこと、世の人ゆるしきこえず」（少女p30）とも言われている。

さて、「二ところの御おほえども、とりどりにいどみたまへり」（総合p375）とあるように、冷泉帝の弘徽殿女御と斎宮女御への寵愛は甲乙つけがたいものであり、兵部卿宮（紫の上の父）は娘を入内させようとしながら「さすがともえ思ほし立たず」（総合p375）と割り込む余地がないことを自覚するほどであった<sup>7)</sup>。

ところが、帝は絵を好み、斎宮女御は絵が巧みであることから弘徽殿側は劣勢になる。そこで権中納言は「あくまでかどかどしくいまめきたまへる御心にて、我人に劣りなむやと思しはげみて」（総合p376）と大人げないばかりに対抗心を燃やす。そして光源氏の発案で内裏総合が行われることになり、新たに絵を描かせることはしないでおうという源氏の考えに反して、権中納言は絵の名手にこっそり新作を依頼するという卑怯とも涙ぐましいともいえる努力をする。しかし、総合は光源氏の描いた須磨での絵日記が決め手となって光源氏方の勝ちとなる。実子でもない斎宮女御をこうして光源氏が親身に世話をするのを見て、「権中納言は、なほおほえおさるべきにやと心やましう思さるべかめり」（総合p391）と不安を募らせるのである。この話では、女性同士の嫉妬は描かれないが、「なほ権中納言の御心ばへの若々しさこそあらたまりがたかめれ」（総合p377）と光源氏に微笑される権中納言が、その代理戦争のようにしかしあくまで独り相撲を取り続ける、悲哀に満ち、かつ滑稽な姿が印象的である。

前後するが、朱雀帝の後宮には、後に帝位に就く皇子を生んだ承香殿女御、女三宮の母で藤壺中宮の異母妹でもある藤壺女御、弘徽殿皇太后の姪の麗景殿女御、落葉宮の母一条御息所（更衣）、朧

月夜尚侍などがあるものの、男子が一人しかいないうえ、物語の傍流ということもあって、あまりその後宮の嫉妬にまつわる状況は描かれぬ。ただし「母女御（藤壺女御）の、人よりはまさりて時めきたまひしに、みないどみかはしたまひしほど、御仲らひどもえうるはしからざりしかば」（若菜上p20）と、藤壺女御が比較的愛されたことは記されている。もっともこれは朱雀院が春宮（承香殿女御所生の皇子）に女三宮の後見を依頼する場面で、朱雀院が母親が違うだけにそこまでは面倒を見てくれないかもしれないと案じている場面に過ぎず、桐壺帝にとっての桐壺更衣や藤壺中宮のように寵愛を一身に受けたというほどではなかっただろう。

もう一か所「竹河」巻の玉鬘の娘（大君）と冷泉院の結婚について考える。

玉鬘は夫の髭黒亡きあと、娘たちの将来を案じている。まず、帝（朱雀院皇子）から入内を求められるが、帝には明石中宮という比類なき人があるだけに「遥かに目をそばめられたてまつらむもわづらはしく、また人に劣り数ならぬさまにて見む、はた、心づくしなるべきを思ほしたゆたふ」（竹河p61）のである。かつて弘徽殿に恐れをなして藤壺の母が躊躇したのと軌を一にする感情であろう。明石中宮は弘徽殿のような「性悪」ではないが、ここでは彼女を楊貴妃になぞらえて<sup>8)</sup> 疑心暗鬼に陥っているのである。

そこに、四十三歳の冷泉院からも内意があった。かつて玉鬘は若かりし日に大原野行幸で冷泉帝の姿を見て心をときめかせたことがあり、帝からも求められて尚侍として近侍するはずであった。それが髭黒による暴力的な結婚のために破綻することになった。そのことを長年申し訳なく思ってきただけに冷泉院からの求めは拒否しがたい面もあった。

夕霧の子息の蔵人少将も大君への熱心な求愛者だったので、夕霧は姉弟として親しく交流のある玉鬘に伺いを立てる。まだ身分の低い蔵人少将に不満のある玉鬘は、冷泉院からの求めがあることを理由に断ろうとするが、夕霧は「そもそも、女一の宮の女御はゆるしきこえたまふや。さきざきの人、さやうの憚りによりとどこほることもはべりかし」（竹河p67）と言って弘徽殿に遠慮して入内の話がこれまでも滞ったことがあるはずだと反論する。しかし玉鬘の答えは意外にも「女御なん、つれづれにのどかになりたるありさまも、同じ

心に後見て慰めまほしきをなど、かのすすめたまふ」（竹河p67）というものであった。弘徽殿女御こそが院とともに後見したいからと勧めてくれるのだというのである。玉鬘とは異腹の姉妹でもある<sup>9)</sup> 弘徽殿女御は、「うとうとしう思し隔つるにや。上は、ここに聞こえ疎むるなめりと、いと憎げに思しのたまへば、戯れにも苦しうなん。同じくは、このごろのほどに思したちね」（竹河p82）と出来るだけ早く宮仕えするようにと真剣に口添えまでしてきた。玉鬘もかつて冷泉帝に宮仕えする話があったとき、「（秋好）中宮も（弘徽殿）女御も、方々につけて心おきたまはば、はしたなからむ」（藤袴p327）と思い悩んだこともあっただけに、夕霧の言うことも理解できたはずだが、玉鬘は最終的にこの異母妹を信じて、娘を冷泉院に差し上げる決意を固める。弘徽殿女御もまた、子を持たないこともあって、大君が来たからと言って嫉妬するはずもなく、養女を得るような気持ちなのだと自身の気持ちを「錯覚」したのであろう。

ところが、大君が翌年女兒を出産し、事態は一変する。弘徽殿女御は「ことに軽々しく背きたまふにはあらねど」（竹河p101）と、一応穏やかにしていても、女房たちはそれでは済まない。玉鬘もその雰囲気を感じて不安が募り、さらに五年後に大君が男児を生むとさしもの弘徽殿女御も「あまりかうてはものしからむと御心動きける。事にふれて安からずくねくねしきこと出で来などして、おのづから御仲も隔たるべかめり」（竹河p105）とあるとおりに、いくらなんでも、と動揺して大君との仲も隔たることになったのである。そして語り手（作者）は「もとよりことわりえたる方にこそ、あいなきおほよその人も心を寄する」（竹河p105）と、本妻に味方するのが世の常だと言い、実際、冷泉院内部の人たちの多くは大君に非難がましい目を向けるようになったのである。傷心の大君は里に下がりがちになり、後悔した玉鬘は親子以上に年の離れた薫に「女御を頼みきこえ、また後の宮の御方にもさりとも思しゆるされなんと思ひたまへ過ぐすに、いづ方にも、なめげにゆるさぬものに思されたなれば、いとかたはらいたくて」（竹河p108）と悩みを打ち明けている。

玉鬘は尚侍の職を譲って内裏に入れた中の君についても「（髭黒）大臣おはせましかばおし消ちたまはざらまし」（竹河p103）と、父という後見を失った娘、そして夫を失った自身の悲哀を痛感することになる。

後宮内の嫉妬は、女性たちが別棟ではあっても近くに起居して、姿を見ることもあるという特性もあって、近侍する女房を交えつつ執拗なものになりかねない。特に身分が低く後見人の力の弱い女性は標的にされやすく、男子を生むことでかえって虐げられることもあった。また直接的な被害はなくとも、何かされるのではないかという不安に苦しめられることも少なくなかった。彼女たちの動静は自身の人生のみならず、実家の浮沈にもかかわるだけに、両親の気の揉み方もただならぬもので、彼らは時として狼狽し、常軌を逸した行動に出ることもあった。この物語には、随所にそれらの多様でしかも哀しい人間模様が描かれているのである。

## 2 妻の座を脅かされる

前稿でもっとも大きな問題としたのは本妻（こなみ）が後妻（うはなり）に妻の座を脅かされることであった。この項では前稿との多少の重複を厭わず、夫の新たな女性に対する元の妻の嫉妬の諸相を見ていきたい。

若き日の頭中将は、右大臣の四の君を正妻としながら色好みの本領を發揮してさまざまな女性を渡り歩いていた。その一人に、のちに夕顔と呼ばれる人があり、「帚木」巻のいわゆる「雨夜の品定め」においてその関係を吐露している。この「品定め」では左馬頭が「もの怨じをいたく」（帚木p71）する、つまり嫉妬深い女に指を噛まれた経験談を語っており、四人の若者たちは嫉妬への嫌悪をすでに共有している。そういう状況で、頭中将は女児までもうけたこの女に対して「この見たまふるわたりより、情けなくうたてあることをなむさるたよりありてかすめ言はせたりける」（帚木p81）という出来事があったと語る。かなり漠然とした言い方だが、要するに妻の実家から嫌がらせがあったということで、これは聞いている者が察し得る最低限の表現なのであろう。そしてその詳細は「夕顔」巻に夕顔の女房右近の回想によって補う。それによると、頭中将は少将時代にこの女を見そめて三年ばかり通っていたが「去年（光源氏十六歳、夕顔十八歳）の秋ごろ、かの右の大殿よりいと恐ろしきことの聞こえ参で来し」（夕顔p185）というのである。「聞こえ」とあるのみなので、「うはなり打ち」<sup>10)</sup>に至る直前の脅迫にとどまったようだが、「思ひのままに、籠めたるところおはせぬ本性」（賢

木p146）の、つまり遠慮会釈なしに何でも表に出してしまう右大臣とその一族らしい執拗な、また右大臣家という家柄を鼻にかけた傲慢な態度がうかがわれよう。頭中将の北の方は、身分の高さでは夕顔など相手にならないが、夕顔が子を持つまでに至っただけに許しがたいものがあったのだろう。

葵の上と六条御息所の関係は前稿で取り上げようにならぬが、ここでは『源氏物語』に即してのみ考える。

前春宮妃の六条御息所は大臣家の出身で、春宮が帝位に就けば彼女自身は中宮になり、男子を産めばその子が帝位に就くという未来図が描かれたはずである。しかし父大臣は亡くなり、春宮も夭折し、産んだのは女子一人であったため、六条という都の中心から離れた隠居屋敷のようなところに世間から半ば忘れられて住まいる。この経歴だけでも栄光と挫折の運命に翻弄される御息所の人生が見て取れるが、そんな折に七歳年少の光源氏が通い始め、しかしやがて訪れは頻繁ではなくなっていくのである。光源氏は父桐壺帝から御息所を軽々しく扱ってはならないと戒められたうえ、「(葵の上、御息所の) いづれをもなだらかにもてなして、女の恨みな負ひそ」（葵p18）と忠告される。

光源氏の正妻は葵の上で、彼女は現役左大臣家という超一級の家柄の出身である。長らく子に恵まれなかったがついに懐妊を果たし、これが一層御息所に敗北感を与えることになる。そして起こったのが有名な車争いであった。賀茂斎院御禊の見物に出た（というより供奉する光源氏の姿を観たいと思った）御息所は、葵の上一行に車を排除されたあと、「心やましきをばさるものにて、かかるやつれをそれと知られぬるが、いみじうねたきこと限りなし」（葵p23）とプライドを傷つけられたことを嘆き、光源氏が葵の上の車の前を通るときに恭しい態度をとるのを見るにつけても「おし消たれたるありさまこよなう思さる」（葵p24）と、うちひしがれるのである。

車争いがあったことを聞いた光源氏は「かかるなからひは情かはすべきものとも思ひいたらぬ御掟に従ひて、次々よからぬ人のせさせたるならむかし」（葵p26）と、葵の上の平素の思いやりのなさを真似た虎の威を借る家来の所業だろうと推測して御息所を気の毒に思い、後年この出来事を「時による心おごりして、さやうなることなん情なきことなりける」（藤裏葉p446）と回顧するように、

彼にとっても悪夢のような忘れ難い体験になったのである。

そして、出産間近の葵の上にしつこい物の怪が取り憑くと、葵の上の親たちは「この御息所、二条の君（紫の上。まだ夫婦にはなっていない）などばかりこそは、おしなべてのさまには思したらごめれば、恨みの心も深からぬ」（葵p32）と、寵愛が深いらしい二人の女性の恨みではないかとのみ言っている。「車争ひに人の御心の動きにけるを、かの殿には、さまでも思しよらざりけり」（葵p33）というとおり、車争いで与えた御息所の屈辱には考えが及んでいない。ハラスメントが、加害者には実感がないのは世の常なのである。なお、紫の上の存在に関しては、葵の上側は詳細を知らず、「『二条院には人迎へたまふなり』と人の聞こえければ、いと心づきなしと（葵の上は）思いたり」（紅葉賀p316）という程度であった。

御息所の生霊は執拗に葵の上を苦しめたが、葵の上は無事出産を果たし、光源氏は葵の上について「年ごろ何ごとを飽かぬことありて思ひつらむ」（葵p45）といとしさが増す。そうなるであろうことは、御息所は「ひとつ方に思ししづまりたまひなむ」（葵p34）と鋭く見通しており、伊勢下向を決心するのは自然の成り行きなのであった。

葵の上は頓死するが、男児は優秀で生真面目な青年に成長していく。後年、光源氏は自らの四十賀を催してくれた秋好中宮（御息所の娘）と夕霧（葵の上の息子）に感慨を抱き、それを作者は「かの母北の方の、伊勢の御息所との恨み深く、いどみかはしたまひけむほどの御宿世どもの行く末見えたるなむさまざまなりける」（若葉上p102）と表現している。

このあと御息所は伊勢に下り、帰京して間もなく亡くなるが、なおも紫の上や女三宮に死霊となって取り憑くという執念深さを見せる。しかしそれは彼女たちへの直接的な恨みではなく、「（光源氏が御息所について）心よからず憎かりしありさまをのたまひ出でたりしなむ、いと恨めしく」（若葉下p236）と思ったことがきっかけになっていることも忘れてはなるまい。

御息所の苦悩は他の女性にも影響を与えた。光源氏との関係がうまくいかず、御息所が伊勢下向を考えていると聞いた朝顔の姫君は「いかで人に似じと深う思せば、はかなきさまなりし御返りなどもさをさなし」（葵p19）と、御息所の轍は踏むまいとするのである。

夕顔の娘である玉鬘は九州での少女時代を過ごしたあと都に戻り、光源氏の養女として冷泉院に尚侍として宮仕えすることになった。ところが大原野行幸で見た冷泉院の美貌に対して「（玉鬘の）若き御心地には見おとしたまうてけり」（行幸p292）とまるで好ましく思わなかった髭黒大将に強引に迫られて結婚するという意外な展開があった。

有頂天の髭黒は玉鬘を一日も早く自邸に迎えたいと思うが、そこには北の方がいる。ところが髭黒は「北の方の思し嘆くらむ御心も知りたまはず」（真木柱p356）という無神経なところがあって、遠慮なく玉鬘を迎えるための建物の整備を始めたのである。折しも北の方は物の怪に悩まされていて正気を失うこともあった。そんなある日、あにくの雪ではあったが、玉鬘のところに行こうとする髭黒に、嫉妬のそぶりも見せない北の方は女房に目いっぱい香をたきしめさせる。そしていよいよ夫が出かけようという瞬間、平然としていたはずの北の方は「にはかに起き上がりて、大きな籠の下なりつる火取をとり寄せて、殿の背後に寄りて、さと沃かけたまふ」（真木柱p365）という、誰もが予期していなかった奇行に及んだのであった。芳香の残滓である「灰」は「こなみ」の隠喩でもあろう。

光源氏の子夕霧は父とは違って「まめ人」といわれる堅物で、女性に対しては不器用であった。二歳年長の雲居雁とは幼馴染の恋愛結婚で、浮気心を持つこともめったになく、義母に当たる紫の上の姿を垣間見た時（野分巻）も憧れは限りなく強まりはするものの、それと同じほどのエネルギーで自制心が働くような人柄である。二人の間には子も多く誕生し、雲居雁は家柄のよさ（大臣家）もあって、正妻の座はもはやゆるぎようがない。やはり夕霧の子を多く生んだ藤典侍（光源氏の乳母子惟光の娘）は、家柄から言って雲居雁が相手にするほどの者ではなかった。逆に藤典侍は夕霧と雲居雁の結婚に際して「かくやむごとなき方に定まりたまひぬるを、ただならずうち思ひけり」（藤裏葉p447）と心中穏やかではなかったが、身分を考えた場合、それはやむを得ないことであった。

そんな雲居雁の前に、夕霧の親友の柏木の妻であった落葉宮という思いがけないライバルが出現する。柏木が「一条にものしたまふ宮（落葉宮）、事にふれてとぶらひきこえたまへ。心苦しきさまにて、院などにも聞こしめされたまはむを、つく

ろひたまへ」(柏木p317)と遺言したこともあって、夕霧は柏木亡きあとにしばしば落葉宮を訪ねて世話をしていた。そのうちに落葉宮への恋情が湧き、その噂は雲居雁の耳にも届いたため、夕霧が落葉宮邸から帰っても空寝をしたり無視したりという仕打ちをこれ見よがしに繰り返した。雲居雁は多くの子女の世話で所帯糞れもして、幼子が夜泣きした時には「耳はさみしてそそくりつくろひて(中略)つぶつぶとをかしげなる胸をあけて、乳などくくめたまふ」(横笛p360)という、いかにも「家刀自」然とした姿まで描かれる。あげくには瀕死の一条御息所(落葉宮の母)から届いた手紙を落葉宮からのものと誤解して夫から取り上げるといふ家庭内紛争まで起こしてしまう。夕霧は、実際はまだ落葉宮と親密な関係にはなっておらず、その焦燥感も重なっていっそう妻に嫌気がさす。事情を聴いた花散里が「三条の姫君(雲居雁)の思さむことこそいとほしけれ」(夕霧p470)と同情すると、口が滑って「(雲居雁は)いと鬼しうはべるさがなもの」(夕霧p470)とまで痛罵するのである。雲居雁もまた「まろは早う死にき。常に鬼とのたまへば、同じくはなりはてなむとて」(夕霧p472)と自暴自棄になり、夕霧と落葉宮が契りをおかわすと、二条の実家に帰ってしまう。

多くの子に恵まれて円満であったはずの家庭が、中年を迎えて言動につつましさを失う妻と、本性がまじめだからこそ羽目を外してしまう不器用な夫によって修復しがたいほどの亀裂を入れられてしまう。現代にもありがちな家庭劇といえるだろう。

夕霧は光源氏亡きあと六条院の丑寅の町に住ませた落葉宮と、何とかもとの三条に収まった雲居雁に「夜ごとに十五日づつ、うるはしう通ひ住みたまひける」(匂兵部卿p20)という、滑稽なまでに生真面目な配慮をするというのがこの話のオチになっている。

なお、「夕霧」の巻末には藤典侍がひょっこり顔を見せる。「我を世とともにゆるさぬものにのたまふなるに、かく侮りにくきことも出で来にけるを」(夕霧p488)と、かつて自分を見下げてきた雲居雁が悲惨な目に遭ったのを知った藤典侍は「数ならば身に知られまし世のうさを人のためにも濡らす袖かな」(夕霧p488)という同情とも皮肉とも思える歌を雲居雁に贈り、雲居雁は、この女も穏やかな気持ちではいられまいと思って「人の世のうきをあはれと見しかども身にかへんとは思はざりしを」(夕霧p489)と返す。そして、内親王という、もっ

とも身分の高い「うはなり」の出現によって起こった悲喜劇の結末に、作者は二人の「こなみ」の生んだ十二の子を列挙して巻を閉じるという形でとどめを刺すのである。

宇治の女君たちは世間から忘れられた存在で、「世を宇(憂)治山」と観じて生きる宿命があった。匂宮と結婚した中の君も、匂宮が夕霧の六の君と結婚すると知った時には「数ならぬありさまなめれば、必ず人笑へにうきこと出で来んものぞとは、思ふ思ふ過ぐしつる世ぞかし」(宿木p383)と覚悟をしながら生きていた日々を反芻し、「なほいとうき身なめれば、つひには山住みに還るべきなめり」(宿木p383)と将来を見定めている。相手は時の大臣の娘で、実母は藤典侍ながら落葉宮を養母とするという家柄のよさに加えて「いとすぐれてをかしげに、心ばへなども足らひて生ひ出でたまふ」(匂兵部卿p32)だけに「すこし我はと思ひのほりたまへる親王たち、上達部の御心尽くすくさはひ」(匂兵部卿p19)であったという美貌の持ち主である。中の君が太刀打ちできないと思っても当然であろう。そして実際に匂宮が六の君に通い出すと「今宵かく見棄てて出でたまふつらさ、来し方行く先みなかき乱り、心細くいみじきが、わが心ながら思ひやる方なく心憂くもあるかな」(宿木p403)と妬ましい気持ちにもなるが、それは彼女の性格というよりは、父や姉の思いに背くような形で宇治を出たことへの後ろめたさやわが身のほどを思い知るがゆえの諦観のなせるわざであろう。彼女がこの屈辱を我慢するのは処世術ではなく「心あらむ人は、数ならぬ身を知らでまじらふべき世にもあらざりけり、とかへすがへすも、山路分け出でけんほど、現ともおぼえず悔しく悲しければ」(宿木p421)と自省するからであった。

匂宮は二条院に来ていた浮舟を見て衣の裾をとらえて言い寄ったが浮舟はかろうじて逃れた。その後、匂宮は中の君に浮舟の素性を問うが、そのとき「かうはかなきことゆゑ、あながちにかかる筋のもの憎みしたまひけり」(浮舟p105)と、中の君が嫉妬しているものと思っている<sup>11)</sup>。中の君は浮舟について話すわけにはいかず「おしこめてもの怨じしたる世の常の人になりてぞおはしける」(浮舟p106)と、嫉妬しているふりをしてごまかそうとする。ここでも彼女は世間のありきたりな嫉妬心など持たないのである。

### 3 紫の上の嫉妬

「はかなき御すさびごとをだに、めざましきものに思して、心やすからぬ御心ざまなれば」(若菜上p52)というのが紫の上の性格だとして、『源氏物語』の作者は、紫の上の「弱さ」ないしは「欠点」として嫉妬深さを賦与した。和歌、音楽、書、裁縫、その他あらゆることに秀で、他人への細かい思いやりを持ち、善意にあふれたこの人物が、こと夫の浮気に関しては強い嫉妬心を燃やし、しかもそれは隠そうとしてもおのずから表に現れる類のものであった。ただし『かげろふ日記』の作者が夫のあだし心を告白体で糾弾したのとは違う形で、女性の苦悩を体現する。しかも彼女には、その苦悩の表現である嫉妬を見苦しいものとして自ら否定せざるを得ないというもう一つの苦悩がある。この、二重底の苦しみを抱きながら生きていく姿がこの理想的な女性をきわめて人間臭いものに行っているともいえるか。

子孫繁栄のためにも、上流貴族が複数の妻を持つのは常識的なこととされ、藤原道長は二人目の妻を持つとうとしない息子頼通に「男は、妻はひとりのみやは持たる」(『栄花物語』「たまのむらぎく」)と叱りつけたほどであった。しかし『源氏物語』の多くの女性たちはとっくにそういう建前に屈することのない自我を持っていた。

光源氏が明石の君と出会ったことを伝えると、紫の上は「おいらかなるものから、ただならずかすめたまへる」(明石p260)とあてこすってくる。それにおびえた光源氏は明石の君に通うのをためらい、その予想どおりの仕打ちに落胆した明石の君は「今ぞまことに身も投げつべき心地する」(明石p260)のである。光源氏の帰京はさらに明石の君の苦悩に追い打ちをかけ、逆に彼女の懐妊は紫の上に新たな悩みをもたらす。そして紫の上は嫉妬を光源氏に指摘されると「常にかやうなる筋のたまひつくる心のほどこそ、我ながら疎ましけれ」(濡標p291)と自分で自分の心が嫌にもなるのである。

やがて明石の君が姫君を出産すると、光源氏は奥の手として姫君を紫の上の養女にすることを提案し、それは両者に受け入れられることになる。明石の君にすれば娘の将来が開ける可能性が高まり、紫の上は子のない寂しさを紛らわすこともできる。そして光源氏は二人の女性が対立しないことで安心感が得られるのである。

紫の上は姫君を育てているうちは「今はことに怨じきこえたまはず、うつくしき人(明石の姫君)に罪ゆるしきこえたまへり」(薄雲p437)「をちかた人のめざましきもこよなく思しゆるされにたり」(薄雲p439)と、明石の君を許したい気持ちになる。ところがそうでないときは「なほ、北の殿(明石の君)をば、めざましと心おきたまへり」(玉鬘p126)「思ひやり気高きを、上はめざましと見たまふ」(玉鬘p136)というのが本音なのであった。また紫の上付きの女房たちも、正月早々光源氏が明石の君のところ泊ると「南の殿には、ましてめざましがる人々あり」(初音p150)と見え、両者の和解はまだ容易ではなさそうである。

ところが、姫君が春宮に入内する際に紫の上は、実の母娘はやはり一緒になるべきだと判断し、「このをりに(明石の君を入内する姫君に)添へたてまつりたまへ」(藤裏葉p449)という配慮を見せる。それによってついに「二人の母」の対面が実現し、このできごとが「うちとけぬるはじめなめり」(藤裏葉p451)ということになるのである。

明石の君はこれほどまでに真剣に娘を育ててくれるとは思わなかったと紫の上に感謝し、姫君に紫の上への感謝の気持ちを忘れてはならないと諭し、「今は、来し方行く先、うしろやすく思ひなりにてはべり」(若菜上p123)と考えるに至る<sup>12)</sup>。

朝顔の姫君は光源氏の叔父桃園式部卿宮の娘で、光源氏は若いころからこの姫宮を慕い続け、身分の上からも彼の正妻にふさわしい人物として登場する。

「朝顔」巻は光源氏が内大臣であった三十二歳の九月から冬にかけての物語で、斎院を退下して桃園宮で暮らしていた朝顔を光源氏が訪問するところから始まる。既述のように、朝顔は六条御息所の二の舞にはなるまいとして光源氏の求愛を受け入れてこなかったが、今なお執拗に朝顔を慕う光源氏は宣旨という女房を介して求愛し、時には宣旨を自邸(二条院)に呼び寄せて、紫の上には知られないように自身の居室の東の対で相談したりもする。その関係を耳にした紫の上は、朝顔は同じ皇族出身だが世評の高い人だけにもし光源氏の心が移りでもしようものなら体裁の悪いことになるだろうと「年ごろの御もてなしなどは立ち並ぶ方なくさすがにならひて、人に押し消たれむことなど」(朝顔p478)と人知れず思い悩む。朝顔を訪ねようとする源氏に対しては目も向けずにただならぬ横顔を見せて「うち背きて臥したまへる」(朝

顔p480)と精一杯の抗議を示し、油断していた自身の迂闊さを悔やむのである。

当の朝顔は、長らく齋院にいて仏事に励まなかったことでもあるので、今後は勤行に励もうとの思いが強い。そのつれなさゆえにかえって恋の炎を燃やす光源氏に対して、紫の上は「いよいよ背きても聞こえたまはず」(朝顔p489)と落胆する。相手の身分や人柄を考えた場合、一時の軽率な浮気心ではないことが察せられるだけに深刻さは増すのであろう。それにしても光源氏の行為は朝顔の心にも紫の上の思いにも背くものだというほかはない。

玉鬘の出現に際しては、紫の上はまずこれまで知らなかった夕顔のことでいささか光源氏を恨む気持ちを抱く。しかしそれは遠い過去のことであり、光源氏が男たちに玉鬘のことでやきもきさせてやりたいというたとしなめるゆとりは持っている。そして彼女の鋭い嗅覚は光源氏の玉鬘への思いを察知し、「(玉鬘が)うらなくしもうちとけ(光源氏を)頼みきこえたまふらんこそ心苦しけれ」(胡蝶p184)と皮肉も言うのである。

紫の上の最後の屈辱的な嫉妬は女三宮の降嫁によるものであろう。光源氏から女三宮を迎える話を聞かされたとき、紫の上は「ここには、いかなる心をおきたてまつるべきにか」(若菜上p52)とあっさり承知するような返答をして<sup>13)</sup>、今さら「憎げにも聞こえなさじ」(若菜上p53)と思い、何かと彼女を恨んでいる父式部卿宮の大北の方(髭黒の元の北の方の母)にそれみたことかといわれまいとも思うのである。それでも「事にふれて、ただにも思されぬ世のありさま」(若菜上p62)で、「忍ぶれどなほものあはれなり」(若菜上p63)という思いはやまず、「目に近く移ればかはる世の中を行く末とほくたのみけるかな」(若菜上p65)の一首をそっと書きつける。そして新婚三日目の夜に光源氏が紫の上の夢を見て慌てて帰ると「すこし濡れたる御単衣の袖をひき隠して」(若菜上p69)という姿まで見せる。

ただ、紫の上は女三宮にはもちろんのこと、光源氏に対してもかつてのように厳しい嫉妬のまなざしは向けていないようで、むしろ内省的に自分の老いを感じ、人生への諦観を覚える姿すら垣間見え、それは彼女の成熟でもあろうか。

朱雀院が西山に籠ったあと、実家に戻った朧月夜を光源氏が訪ねたことも紫の上は知るが、そのときの対応は、涙ぐみはするものの「いまめかし

くもなり返る御ありさまかな」(若菜上p85)と語り、その口吻は揶揄するかのようでもあった。

それから七年後、紫の上は「人の忍びがたく飽かぬことにするもの思ひ離れぬ身にてややみなむとすらん、あぢきなくもあるかな」(若菜下p212)と思ひ悩んだまま重病に陥ることになる。

紫の上が亡くなったあと、光源氏は紫の上の嫉妬させてしまったことを思い起し、「などて、たはぶれにても、またまめやかに心苦しきことにつけても、さやうなる心を見えたてまつりけん」(幻p523)と苦勞をかけたことを省みる。さらに、改めて明石の君と紫の上の関係に思いを馳せ、「(紫の上は明石の君を)なまめざましきものに思したりしを、末の世には、かたみに心ばせを見知るとちにて、うしろやすき方にはうち頼むべく、思ひかはしたまひながら、またさりとてひたぶるにはたうちとけず、ゆゑありてもてなしたまへりし」(幻p536)と、和解しつつも適当な距離を置いた紫の上の心構えを回想するばかりであった。

#### 4 六条院の女性たち

六条院が完成して四つの町の女主人となったのは紫の上、花散里、秋好中宮、明石の君であった。ひとつの屋敷の中に複数の女性を入れるのは嫉妬の種を蒔くようなものではあるが、何しろ四町の広大な屋敷であり、それぞれの町は独立性が強い。光源氏は二条院時代と変わらず紫の上と春の町で同居し、他の女性たちは時折訪問する形をとっている。また、秋好中宮は妻妾ではなく、花散里は夕霧の養母で家刀自としての意味が大きいため、六条院は「後宮佳麗三千人」(長恨歌)のごとき「ハレム」ではない。

六条院への転居は、時期が秋であったため、秋をよしとする秋好中宮が春の町の紫の上に優位な立場から歌を贈り、紫の上もまた反論するような歌を返す。それはもちろん風雅の交わりであって、女性たちはこうして「いとど思ふやうなる御住まひにて、聞こえ通はしたまふ」(少女p83)のである。ただしそんな中で明石の君ひとは「かう方々の御移ろひ定まりて、数ならぬ人(明石の君自身)はいつとなく紛らはさむと思して、神無月になん渡りたまひける」(少女p83)と、時期をずらしてひっそり移ることで、例によって卑下した態度をとるのである。

麗景殿女御(桐壺帝の女御)の妹である花散里

は美貌というほどではなかったが、人柄が温和で、裁縫や染め物が巧みな人であった。源氏からの支援を受けているだけで満足するかのようになり、不平ひとつ言わずに装束その他に心配りをし、夕霧の養育や玉鬘の世話にも励み、光源氏から絶大な信頼を受けていた。夕霧と落葉宮との一件では、光源氏が口出しを避けるように沈黙したのに対して花散里はおっとりとした口調ながらも「一条宮渡したてまつりたまへること、かの大殿わたりなどに聞こゆる、いかなる御事にかは」(夕霧p468)と問い質して雲居雁が気の毒だと忠告もしている。また、「いまめかしう心にくきさまにそばみ恨みたまふべきならねば」(霽標p297)「おほかた、何かやともそばみきこえたまはで」(螢p208)というように、源氏の訪問がなくても嫉妬はしない。こうしてみると、彼女は当時の男性にとっては「理想的な妻」で、その存在も六条院の安定には大きな役割を果たしたかもしれないが、やはり一時代前の賢夫人然とし過ぎて、物語の主人公にはなり得ない人物像だともいえるだろう。明石の君が徹底して自制し、意識的に卑下することを自分と娘(明石中宮)を守る信条としていたのに対して、花散里は何の苦も無く自然体の生き方をしているように見える。それゆえに、光源氏が明石の君に「よろづのことなめのめに目やすくなれば、いとなむ思ひなくうれしき」(若菜上p131)と、彼女の穏やかなふるまいに感謝したとき、明石の君は「さりや、よくこそ卑下しにけれ」(若菜上p132)とこれまでの卑下した生き方を顧みて感慨を抱いたことがあったが、花散里がそのような気持ちになることはなかったともいえる。

かくして六条院の女性たちは安定した関係を維持することができるようになり、落葉宮に夢中になっている夫の夕霧に向かって嫉妬をあらわにする雲居雁は「もとよりさる方にならひたまへる六条院の人々を、ともすればめでたき例にひき出でつつ」(夕霧p453)と、六条院の女性たちに比べられることを不満に思うほどなのである。

## 5 男たちの嫉妬

どちらの字にも「女偏」が付く「嫉妬」だが、もちろん男性の嫉妬もある。官位の昇進に関してはある程度は家柄で決まってしまうので、それならばと対抗意識を燃やすのはむしろプライベートな領域になるだろう。

すでに述べたが、権中納言(元の頭中将)は娘の弘徽殿女御が入内した後に光源氏の養女として後宮入りした斎宮女御(秋好中宮)に対抗しようと必死になった。強いライバル意識を持ちながらどうしても勝てない光源氏には嫉妬も抱いたであろう。そして権中納言の、ひそかに絵師を雇って新作の絵を描かせるという、『竹取物語』のくらの皇子並みの滑稽さも嫉妬心を描く作者のたくらみであったのだろう。ほかにも、末摘花や源典侍という、物語の中でもっとも華やぎのない人たちをめぐるさや当てをしたり、玉鬘と近江の君という対照的な「娘」を探し当てたりという、やはり滑稽さを含むエピソードが彼らのライバル意識には見え隠れするのである。男同士が嫉妬してもそれは所詮ばかげたことだ、という作者のメッセージであろうか。

ところが笑い事では済まない話もある。光源氏と柏木の関係も、女三宮をはさんでの嫉妬を抜きには語れないだろう。

女三宮との結婚が実らなかった柏木は、あきらめるどころか、「大殿の君(光源氏)もとより本意ありて思おきてた方におもむきたまはば」(若菜上p136)と、光源氏が出家すればそのあと女三宮を手に入れる、というまことに身勝手な空想を膨らませる<sup>14)</sup>。

一方、光源氏は柏木と女三宮の密通を知ったあと、朱雀院五十賀の試楽で、酔いにまぎれたふりをして「衛門督心とどめてほほ笑まるる、いと恥づかしや。さりとも、いましばしならむ。さかさまに行かぬ年月よ。老いは、えのがれぬわざなり」(若菜下p280)と言って、怯える若者をにらみつける。光源氏はここで密通をおわして責めるのではなく、いずれ老いる若者への嫌味を投げかけるのである。これはすなわち若さへの妬みであり、取り戻せない自分の日々への悔恨でもあろう。

光源氏以後の話になると嫉妬するのはむしろ男たちである。

玉鬘の娘の大君を慕う蔵人少将(夕霧の子)は「ゆるしたまはずは盗みも取りつべく」(竹河p63)とまで思い詰めることもあり、それだけに玉鬘邸で遭遇した薫の評判がよいことを目の当たりにすると、「人はみな花に心を移すらむひとりぞまどふ春の夜の闇」(竹河p73)と嫉妬して打ちひしがれる。大君が冷泉院に参ったあとも「過ちもしつべくしづめがたく」(竹河p93)思い、左大臣の娘を得ても大君を慕い続け、かつての柏木の再来を予感さ

せなくもない。しかし夫亡きゆえに苦渋に満ちた日々を送る玉鬘に焦点を当てるこの巻は、蔵人少将にそれ以上の役割を与えない。玉鬘は、夕霧の息子というだけで昇進するこの若者が官位の喜びよりも恋の悩みゆえに苦しいとわざとらしく涙をぬぐうのを「見苦しの君たちの、世の中を心のままにおごりて。官位をば何とも思はず過ぎしますながらふや」（竹河p112）と冷めた目で見、昇進のままならぬわが子をかawaiiそうに感じるばかりなのである。この巻は「宰相は、とかくつきづきしく<sup>15)</sup>」（竹河p113）と、このあと例えば密通のようなことも予想されるような筆の止め方をするが、あの柏木の命を削るような深刻さのない宰相中將だけに、実際は何も起こりようがないのだ、という余韻を持たせているともいえないか。

宇治十帖では、薫と匂宮の親しさゆえの嫉妬が描かれる。

匂宮が夕霧の六の君に入り浸っているとき、薫は二条院の中の君を訪れ、御簾の中に招じ入れられて語らった。そのあと、匂宮が二条院に戻り、薫の残り香をあやしみ、二人の関係に「さればよ、かならずさることはありなん、よもただには思はじと思ひわたることぞかし」（宿木p435）と疑って動揺し、それは「わがいと隈なき御心ならひ」（宿木p437）に照らせば明らかだと妙な納得の仕方をする。そして「（薫と中の君は）いとよきあはひなれば、かたみにぞ思ひかはすらむかし、と思ひやるぞ、わびしく腹立たしくねたかりける」（宿木p438）「わが御心ならひに、ただならじと思すが安からぬなるべし」（宿木p464）と激しく嫉妬するのである。あまっさえ、薫を装って宇治に入り込んで浮舟と密会したあと、二条院に戻った匂宮は中の君に向かって「まろは、いみじくあはれと見おいたてまつるとも、御ありさまはいととく変りなむかし」（浮舟p137）と自分のしていることを棚に上げて中の君を責めもするのである。

浮舟に夢中になった匂宮は、薫が浮舟を思う古歌の一節<sup>16)</sup>を口ずさむのを聞くと、「かばかりなる本つ人（薫）をおきて、わが方にまさる思ひはいかでつくべきぞ、とねたう思さる」（浮舟p147）と、危機感を募らせ、宇治に向いて浮舟を宇治の対岸に連れ出すという物狂おしい行為に出て、意地悪くも「（薫が妻の）二の宮を、いとやむごとなくて、持ちたてまつりたまへるありさま」（浮舟p153）を伝えたりもする。

秘密の関係が長続きするはずもなく、匂宮と浮

舟の交情は薫の知るところとなる。薫は「この宮の御具にてはいとよきあはひなり」（浮舟p175）と吐き捨てるものの、やはり未練も残り「波こゆるころとも知らず末の松待つらむとのみ思ひけるかな」（浮舟p176）と浮気を責める歌を書き送る。女房の右近は自分の姉が二人の男と関係を持ち、あとから付き合った男に心を寄せていたために「（古くから付き合っていた男は）それにねたみて、つひに今の（新しい男）をば殺してしぞかし」（浮舟p178）という悲劇があったことを語る。こうして浮舟は追いつめられ、「まろは、いかで死なばや」（浮舟p181）と思うに至るのである。

浮舟が入水したと思ひ込んだ薫は「この御ゆかり（匂宮との関係）には、ねたく心憂くのみあるかな」（蜻蛉p270）と敗北感にさいなまれ、匂宮の親しい女房を自分のものにして報復したいと、屈折した考えを抱く。ここには男の嫉妬があるだけで、浮舟はもはや誰からも理解されないという絶望感に襲われても当然であろう。

こうして、出家した浮舟に対して「人の隠しすゑたるにやあらん」（夢浮橋p395）と薫の女心への無理解ぶりをさらすことでこの長大な物語は幕を下ろすのであった。

幻巻までの物語は光源氏を中心に動いていたが、それ以後は女性たちが主体的に自らの人生を切り開いていく姿がむしろ印象的で、いつしか脇役となっていく匂宮も薫も彼女たちの強い精神性に戸惑っているようにも見える。その萌芽は「人に見え、世づきたらむありさまは、さらに」（紅梅p54）と結婚にほとんど関心を持たない宮の御方（真木柱の娘）にうかがわれるが、宇治の大君から浮舟と、加速度的に意志の堅固さが強まっていく<sup>17)</sup>。都の論理に組み込まれた中の君でさえ、薫に宇治への帰訪を積極的に働きかけ、その求愛を拒み通し、浮舟の登場をもたらす役割を果たす強い意志を持ち合わせている。

都から離れた世界に生きた宇治の姫君たちには都の論理がそのまま通用するものではなく、だからこそ都の膠着した思考より進歩的であり得たのかもしれない。さまざまな紆余曲折はありながらも、男性たちを翻弄するかのよう自分の生きざまを決めていった人生は、しかしながらすべてが破滅や絶望につながってしまった。それでもなお、嫉妬する男たちを置き去りにするように意志を貫き通す彼女たちに『源氏物語』の到達した新しい人間像がうかがえるのである。

## 文献、注

- 1) 片山剛. 「うはなり」「こなみ」の諸相 (1) —平安時代を中心に— 千里金蘭大学紀要 (14) 127頁-138頁 (2017)、「うはなり」「こなみ」の諸相 (2) —鎌倉、室町、江戸時代を中心に— 千里金蘭大学紀要 (15) 113頁-125頁 (2018)
- 2) 『新編日本古典文学全集』『源氏物語』は全六巻。(1994~1998)。第一巻は「花宴」まで、以下、「朝顔」まで、「藤裏葉」まで、「幻」まで、「宿木」まで、「夢浮橋」までの構成。
- 3) 片山 (2017)。
- 4) 「うけはしげ」は人の不幸を呪うような気持ちで、髭黒の元の北の方の母 (式部卿宮の大北の方) の嫉妬深さを表す語としても用いられる (若菜上p54)。いずれの人物も陰湿な性格である。
- 5) 弘徽殿は皇太后になっている。
- 6) 后は藤原氏から出るべきという考えは、後に皇族出身者しかいなかった後朱雀天皇時代に藤原生子 (教通女) が「伊勢の託宣などいひて、藤氏の後おはしまさぬ、悪しきことなり」(『栄花物語』「暮まつほし」という理由で急遽入内したという一節からもうかがえる。桐壺帝の藤壺に続いて (朱雀帝には中宮はなかった) 冷泉帝の秋好がその地位に就くことになるのは例外的あるいは好ましくないと見られていたはずである。ちなみに、次の今上 (朱雀皇子) 中宮も光源氏の娘、明石中宮であり、三代続けて源氏出身者が占めることになる。
- 7) 兵部卿宮の娘はのちに入内する (王女御。そのとき父宮は式部卿になっている) ことが「少女」巻に記される。
- 8) 「遙かに目をそばめられ」は白居易「上陽白髮人」に見える「已被楊妃遙側目 (已に楊妃に遙かに目を側めらる)」を引く。玄宗皇帝に召された少女は、皇帝に逢うまでもなく、楊貴妃に睨まれて上陽宮に送られ、そこで一生を過ごすことになる。
- 9) 玉鬘と弘徽殿女御は致仕大臣 (かつての頭中將) の異母姉妹。
- 10) 「うはなり打ち」の実態は、たとえば『権記』寛弘七年二月十八日条には蔵命婦という人物の指示による例が記されている。それによると故藤原兼業の妻の住居に三十人ばかりが押し入って室内にある雑物を激しく破損した。これは蔵命婦が、夫の大中臣輔親がこの屋敷に逗留していたことに嫉妬した結果起した事件だったという。夕顔はこういう仕打ちを恐れたであろう。詳細は片山 (2017)。
- 11) 匂宮は宇治で浮舟に逢ったとき「変らむをば恨めしう思ふべかりけりと見たまふ」(浮舟 p133) と、自分が心変わりすれば浮舟は恨めしく思うだろうと想像するが、これも浮舟の心の奥を見通せていないというべきだろう。
- 12) 紫の上と明石の君の和解前後については片山 (2017) 参照。
- 13) もちろんこれは本心ではない。のちに薫が妻の女二宮 (冷泉院皇女) に浮舟を迎えたいと言ったときにも、女二宮は「いかなることに心おくものとも知らぬを」(浮舟p161) と、よく似た表現で承知する旨を口にしてしている。高貴な女性のプライドの裏返しであろう。
- 14) この関係は、柏木亡きあとにその妻 (落葉宮) と夕霧が結婚する形で実現する。
- 15) 「宰相中將はいよいよ思ひはなれぬ心ありてつきづきしく中將のおもとなどをかたらふといふ事をいひのこしたるべし」(『岷江入楚』)。色恋にうつつを抜かす宰相中將はかねてより取次ぎをさせてきた中將のおもと (大君の女房) などを語らったことであろう、と言いさしている。
- 16) 「さむしろに衣片敷き今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫」(『古今和歌集』恋四・689・よみ人知らず) の一節「衣片敷き今宵もや」と口ずさんだ。
- 17) 薫の目には、大君は「おいらかなる」(権本 p208)、浮舟は「おいらかにあまりおほどき過ぎたる」(東屋 p96) といういかにもおっとりした性格に見えるのだが、結局彼は二人の心の内奥までは見通せなかったのである。